

新聞記事でたどる日本のベートーヴェン受容: 1927年のベートーヴェン没後百年祭まで

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 越懸澤, 麻衣, Koshikakezawa, Mai メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2217

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



新聞記事でたどる日本のベートーヴェン受容

——1927年のベートーヴェン没後百年祭まで——

Beethoven Reception in Japan through the Newspapers
Until the Centenary of Beethoven's Death in 1927

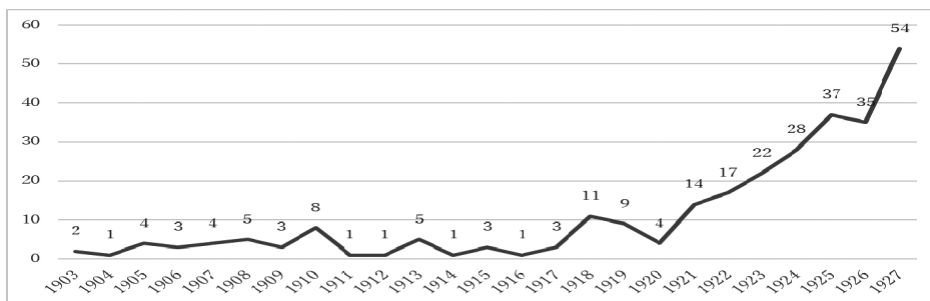
越懸澤 麻衣

Koshikakezawa Mai

はじめに

本稿は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が日本においてどのように語られてきたのかを、新聞の記事をたどることで考察しようという試みである。西洋音楽が多くの人々にとってまだ身近な存在ではなかった明治・大正時代、新聞記事は西洋音楽を、そしてベートーヴェンを広く伝える重要なメディアだったと思われる。というのも新聞は、主に音楽愛好家が手に取る音楽雑誌や専門書とは異なり、とりたてて音楽に関心のない人も含めた一般の人々が読者だからである。同時代でも、音楽雑誌と新聞とでは必然的に内容や書き方は異なったであろう。では、そうした一般紙ではどのような話題が、どのように報じられたのだろうか。

今回は、対象をベートーヴェンの没後100年にあたる1927年までとし、容易に検索が可能な『読売新聞』と『朝日新聞』の東京版を参照する¹。記事の調査には、両新聞のオンライン・データベースを用い、「ベートーヴェン」に言及のある記事『読売新聞』114件、『朝日新聞』162件の計276件ⁱⁱを抽出した。年ごとの件数の推移は【表1】に示す通りである。



【表1 「ベートーヴェン」に言及された1927年までの『読売新聞』と『朝日新聞』の記事の数】

「Beethoven」は明治・大正時代においては、今日でもよく見かけるベートーヴェンやベートーベン以外にも、バートオフェンやバートーヴェン、バエトハウベンなど実にさまざまな表記がなされた。その

ため、各データベースである程度の表記ゆれは検索されるようになっているようだが、すべての記事を拾えなかった可能性は残る。しかしたとえ不完全であったとしても、全体的な傾向は十分に把握できるであろう。なお、史料からの引用にあたっては、旧漢字は新漢字に改めたが、仮名遣いはそのままとした。引用する新聞記事の出典は(新聞名 西暦年.月.日)で記す。

1 新聞記事が伝えたこと

先に述べたように、今回の調査ではベートーヴェン(表記ゆれを含む)という固有名詞が現れたすべての記事を対象としている。ここに集められた記事にはそれゆえ様々な内容のものがある。大まかに分類すると、ベートーヴェンや彼の作品についてⁱⁱⁱ、ベートーヴェンの作品が演目に含まれる演奏会について、ベートーヴェンゆかりの街ウィーンやボンの旅行記、書籍やレコード^{iv}の広告や紹介、ラジオ放送関係、海外のベートーヴェンに関する演奏会や著作の紹介、音楽が主題ではない文章におけるベートーヴェンへの言及などである。それらすべてを詳細に検討する紙幅はないため、まずは先行研究の成果を補完できると思われる以下の5つの観点に絞って考察していきたい。

1-1 演奏会情報：告知、批評

新聞にも音楽雑誌と同様、演奏会の告知や批評がしばしば掲載された。東京音楽学校、日比谷公園音楽堂、帝国劇場、有楽座、報知講堂、音楽奨励会、明治音楽会、神田青年会、東京博覧会での演奏など、さまざまな場および演奏団体が両新聞で取り上げられた。また、レコード音楽会の開催がたびたび告知されたことは時代を反映していると言えよう。

ベートーヴェンの名が最初に言及された演奏会の報道は1905年の「日比谷公園奏楽」(朝日1905.8.27)で、前日8月26日の公演演目の中に「宗教的寧ろ悲観的大音楽家独逸のベートーヴェン」による「大序エグモント」が含まれていたことが報じられた。1905年に欧化政策の一環として完成した日比谷公園音楽堂では、基本的に月2回の定期演奏会が開催され、陸軍と海軍の軍楽隊が交互に出演していた^v。この野外コンサートは無料で誰にでも開かれたものであった。軍楽隊によるベートーヴェン作品の演奏は、日比谷公園以外での若干の機会も含め、1905年から1927年までにのべ41曲にのぼる(谷村2010)。なお、1907年4月14日以降、「円舞曲 願望ワルツ Le Désir」が「ベートーヴェン作」として何度か上演されているが、これは偽作である^{vi}。軍楽隊のレパートリーの中で、ベートーヴェンの作品が目立って多いわけではないが、この時代にあつては、軍楽隊での演奏はベートーヴェン作品を聴ける貴重な機会の一つだったことは間違いない。

しかし、軍楽隊のこのような演奏が日本の最初期のベートーヴェン演奏だったわけではない。ベートーヴェンの作品を日本人が最初に演奏した記録は、前述の日比谷での演奏からさかのぼること20年、1885年7月20日に行われた音楽取調掛の卒業演習会での合唱《君ハ神》(=《6つのゲレルトの詩による歌曲集》Op. 48より第4曲〈自然における神の栄光 Die Ehre Gottes aus der Natur〉)である。その後19世紀の間も編曲された日本語歌詞の合唱曲やピアノ・ソナタ、ヴァイオリン・ソナタを中心に、毎年数曲が音楽取調掛およびその後続機関である東京音楽学校で演奏された(西原2000:387-

378)。『読売新聞』の「ヨミダス歴史館」は1874年から、『朝日新聞』の「聞蔵II」は1879年からの紙面を検索でき、音楽取調掛や東京音楽学校での演奏会の記事も散発的に掲載されているが、ベートーヴェン作品が演奏された演奏会は1908年ようやく報じられる（朝日1908.12.1）。

明治20年から明治40年（1887～1907年）のベートーヴェン作品の演奏会記録を調べた福本康之は、この間の全89件のうち1887～1903年の31件については東京音楽学校以外での演奏が1件だったのに対し、1904年～1907年には58件中50件が東京音楽学校以外であったことを指摘し、1903年頃に教育機関の外に演奏が広がった、としている（福本2004：180）。新聞記事では上記のとおり1903年以降しか言及が確認されないで、そこで東京音楽学校での公演が大きな位置を占めていないことは、福本の見解を裏付ける。このことから同時に、ベートーヴェンの作品がまずは主に東京音楽学校で演奏されるなど、東京音楽学校はわが国のベートーヴェン受容を実際に推進した重要な機関ではあるが、当時そうした事実を知ることができたのは関係者や音楽雑誌を読む音楽愛好家だけであり、一般市民にはあまり伝わっていなかった可能性が読み取れるだろう。

1-2 音楽家の、そして芸術家の「代名詞」として

次に、ベートーヴェンについて書かれたわけではない記事において、どういう脈絡で「ベートーヴェン」の名が現れるかに注目しよう。たとえば1903年、「所謂音楽改良論者（上）」（朝日1903.12.30）では「音楽論といふと直にビートルベンやモザルトの御託を翻訳するのだらうと、気の早い連中は合点なさらう」と始め、日本音楽の改良について述べられている。同様に1905年、日本固有の音楽を作る必要性を説いた東儀鉄笛（1869～1925）は、「日本古来の物」に対する「西洋音楽」の代表として「ワグネル」と「ベートウエン」の名前を挙げた（読売1905.5.7）。また1909年の「商店訪問記」には、共益商家楽器店を訪れると、応接間に「ビートルベン氏、ホワイチング[・]メーソン氏、メンデルソン氏、バハ氏、ショパン氏、グルック氏等」の肖像が掛かっていたとある（読売1909.5.2）^{vii}。「大作曲家」の中に一人だけ音楽取調掛の初代お雇い外国人ルーサー・ホワイティング・メーソン Luther Whiting Mason（1818～1896）が名を連ねていることは今日の我々には奇妙に映るが、この時代ならではの感覚なのだろう。いずれにせよこれからは、ベートーヴェンが有名ではあるものの、西洋音楽の（≒ドイツ語圏の）代表的な作曲家たちのうちの一人と認識されていたことが確認できる。

一方1910年代以降、西洋音楽の代表的な存在として、他の芸術家（画家や作家）と共にベートーヴェンの名前に言及する例が見られる。美術評論家の関如來（1866～1938）は「芸術批評論の一節」（読売1915.8.15）で、「芸術の傑作に自己を表現した」人物として、モーツァルト、ベートーヴェン、レンブラント、ラファエロの名を挙げた。また医者で作家の古屋芳雄（1890～1974）は『『暗夜』出版の前に 自己の創作動機を探る』の中で、「純芸術の使徒」としてベートーヴェン、レンブラント、ゴッホの名を並べた（読売1919.9.28）。さらに、「映画劇に就いて（五）」（朝日1921.12.25）では新しいジャンルとしての映画劇に「映画芸術界のシェークスピア、ベートーヴェンが現れた暁には」、映画劇も劇と並ぶ「大芸術になる希望がないとは言へない」と述べられている。こうした状況を鑑みると、音楽評論家の兼常清佐（1885～1957）がベートーヴェンを「音楽といふことの漫然たる代名詞」（読売

1918.12.14) としたことも、あながち誇張ではなかったのだろうと思われる^{viii}。

1-3 女性が「ピアノを弾ける」ということ

女性の音楽愛好家を紹介する際、ベートーヴェンが好きだ、あるいはベートーヴェンの曲が弾ける、ということに言及されている記事も目にとまる^{ix}。たとえば新代議士夫人を紹介する記事で、法務大臣などを歴任した牧野良三(1885~1961)の夫人は「多趣味」で音楽も嗜み、「自分では何も致しません」が「蓄音機で楽しんで」いて「殊にヴェートーベンのもの」が良いと述べた、とある(読売1920.5.25)。また1908年、皇太子妃殿下(貞明皇后、1884~1951)の音楽について「幸田御用掛毎週金曜日の午後参殿して御相手申上ぐる由なるが、[...]御上達遊ばされたれば今はベートーベン、モザート等の最も莊嚴にして且高尚幽婉なる曲のみを御稽古ある迄に御進歩遊ばされたり」と伝えられた(朝日1908.5.20)。1923年には良子女王(香淳皇后、1903~2000)が「今神戸絢子の指導によつてショパンやベエトーヴェンなど自由に演奏されるやうなお手並みになられた」(朝日1923.12.25)ことや「音楽殊にピアノは非常にお好きで、学課後なども学友と共にベートヴェンを演奏され」たことが記事になっている(朝日1923.12.29)。「ベトウベンの難曲を弾く少女」(読売1926.9.12)と題された小学6年生の少女を写真付きで紹介する記事もある。

こうした取り上げ方からは、この時代、ベートーヴェンの作品が「難曲」ではあるものの、少し練習し上達したら弾けるようになる曲、つまり女性が「ピアノを弾ける」ということを証明するような作品だった可能性が読み取れる。ここには嗜みとしてピアノを習う女性が増えたことも関係しているだろう。日本の女性にとって、ベートーヴェンが「難解な作品」として敬遠されるものではなく、むしろ目標のようになっていたことは注目される^x。

1-4 《交響曲第9番》への大いなる注目

ところで、ベートーヴェンの《交響曲第9番》Op. 125は今日でこそ「年末の風物詩」として全国で何度も繰り返し演奏されているが、1927年以前にはまだそういった演奏の伝統はなかった^{xi}。しかし、だからといって新聞紙上でまったく話題に上らなかったわけではない。

1912年、田村寛貞(1883~1934)^{xii}は「近來人が音楽論をする事がふえたがそれは耳から入つた音楽論でなく目から入つた論」であり「外国の書を読んでうけうりをするのでバツハの曲すら其人等には解つて居ない」と批判的に述べ、「ヴェートヴェエンの第九シンホニー、ドウブシユ [=ドビュッシー]の『ペリアスとメリサンド』などは確に優れたものであるが果して彼等評者の耳に解るであらうか大なる疑問である」と問うた(読売1912.12.26)。田村はこの時期の日本では、「第九」のような大曲は時期尚早だと判断したようだ。その約10年後の1921年、兼常清佐は「私共は今直に音楽学校でマーレやシートラウスが聞かれやうとは思はぬ。然し些くともベートーヴェンの主なるものを聞かせて貰ひたい。願くば其の『第九』と『メッセ』とを聞かせて貰ひたい」とその願望を述べた(読売1921.12.13)。ここに、グスタフ・マーラー Gustav Mahler (1860~1911) やリヒャルト・シュトラウス Richard Strauss (1864~1949) のような当時の「現代音楽」は難しくても、まずはベートーヴェン—そのような考えが見られるのは興味深い。ともあれ兼常は「今に至つてなほ音楽学校の技術が此の曲

を演奏するに堪えぬと言ふならば其れは此の学校の不名誉である」と辛口の言葉を続けるが、裏を返せば「第九」に挑戦できそうなまでに東京音楽学校の、そして日本の聴衆のレベルが向上していたとみて良いだろう。

日本に住む者にとって「第九」を初めて聴く機会はレコードを通してやってきた。1923年、「第九」全曲の初録音がドイツ（ポリドール盤）とイギリス（HMV盤）で行われ、前者は1923年12月に、後者は1924年5月に発売された。どちらもほどなくして日本に輸入され、まだ関東大震災の爪痕が残る頃ではあったが（あるいはそういう時期だったからこそ）、日本の洋楽ファンを大いに喜ばせた^{xiii}。フランス書院は「第九交響楽は見本到着仕候間来る七月二十日（日曜日）午後七時より報知新聞講堂に於いて演奏仕候御来聴御批判の栄を給はらば幸甚に御座候」（朝日1924.7.11）と広告を出し、舶来したレコードを大々的にお披露目しようとしていたことを窺わせる。なお、このときのSPレコードはポリドール盤（ドイツ・グラモフォン、7枚組）で、ブルーノ・ザイドラー＝ヴィンクラー Bruno Seidler-Winkler（1880～1960）の指揮による演奏であった。

それから半年も経たない1924年11月29日と30日^{xiv}、ついに「第九」全曲が日本で上演の運びとなった^{xv}。東京音楽学校の第48回定期演奏会でのことである。指揮はお雇い外国人のグスタフ・クロン Gustav Kron（1874～?）。このことが発表されると、各紙はこぞって報じた。「我が楽壇で初の演奏 ベートーヴェンの第九交響楽来月末音楽学校で」（読売1924.10.23）と題された記事では、「此れが演奏される時は、我が国楽壇に新たな記録を作ることであらう」とその重大さを伝えた。『朝日新聞』の「音楽だより」（朝日1924.11.27）でも、「難曲中の難曲」と言われる曲を「猛練習を重ね」初めて日本で演奏されることになったと報じられた。こうした高い前評判もあってか、「一週間前に二日間の入場券は売切れ」たという（読売1924.11.27）^{xvi}。「ベエトウヴェンの第九シンフォニーに就て」と題し3回にわたって詳細にこの作品を論じた、作詞家で詩人の藤浦洸（1898～1979）の文章には、当時の「第九」に対する愛好家の熱気がよく表れている。

非常な勢を以て向上した日本音楽界も世界最大偉物の第一線に立つベエトウヴェンの第九シンフォニーを喜ぶ所まで行つた。最近到着したグラモフォンやビクターの影響でもあらうが所謂好楽者の話題はこれに落ちて行く。[...] ここ一つ大見得を切ると同時に自重精進して私共の期待を満足させてほしい。（読売1924.11.1）

実際の演奏も期待を裏切るものではなかったようで、演奏会後には多くの賛辞が贈られた。とりわけ注目を浴びたのは第4楽章で、「オーケストラの音の渦にシルレルの『歓喜の讃歌』を歌ふ二百名の合唱は聞く者を感激に誘つた」（読売1924.11.30）。ピアニストの榊原直（1894～1959）は、その感動を次のように綴った。

クロン氏及び諸演奏者の努力には感謝の言葉がない。特に合唱の出来は。大方の音楽愛好者は御存知だらうが音楽学校の合唱は皆生徒でやつて居る。然も声楽家たらんとして居る人達許りではない。未来の大ピアニストも未来の大ヴァイオリニストも居るのである。[...] 実に立派な出来である。之れ

が涙なしにきいて居られ様か。(読売 1924.12.4)

また、作曲家で音楽評論家の小松耕輔(1884~1966)は、第1楽章の「漫然」とした演奏や第4楽章での独唱者の音量不足に不満を表明したが、「種々の点に於て此度の演出は決して完全といふわけには行かないが、とにかく此演出に困難なる世界の名曲が全部邦人の演奏者によつて我国に上演されたといふことは何といふ喜ばしいことであらう」と「歓喜と感謝」で締めくくった(朝日 1924.12.2)。

もちろん音楽雑誌でも「第九」の初演は大きな話題となった。しかしこうした新聞での大々的な報道は、そのような専門誌を目にしなない大衆にも何やら重要な出来事が起こったことを知らしめたであろう。

1-5 新聞記事が伝えなかつたベートーヴェン像

前述の「第九」の例のように、音楽雑誌・新聞ともども話題になることもあれば、音楽雑誌でだけ頻繁に話題になり、新聞では伝えられなかつたこともある。それが「月光ソナタ」をめぐる逸話である。これまでも指摘されてきたように、明治時代のベートーヴェン像は「月光ソナタ」によって形成されたといつても過言ではない。すなわち、この頃の「月光ソナタ」とは、《ピアノ・ソナタ「幻想風」第14番》Op. 27, No. 2の鳴り響きではなく、ベートーヴェンがこの曲を月夜に靴屋の娘である盲目の少女のために演奏してあげた、というロマンティックな(まったく史実に基づかない)逸話を意味したのであり、このイメージがベートーヴェン像の中心であつた。この逸話は早くも明治時代には音楽雑誌に何度も掲載されていた。さらにこれは、1885年以降中等教育の英語の教科書として明治時代に広く使われたバーンズの『ニュー・ナショナル・リーダー』の第5巻に「Beethoven's Moonlight Sonata」として所収されていたこと、そしてその後翻訳され、1911~1945年まで初等教育の国語読本の国定教科書に採用されたことによって、日本中に広まった。

しかし意外なことに、今回調査できた範囲では新聞記事にこの逸話は見られなかつた。『「月光の曲」と夕暮れの曲』(読売 1918.9.21)や「中秋の良夜に 月光奏鳴曲」(朝日 1926.9.21)など「月光ソナタ」を話題にしている記事はあるものの、件の盲目の少女の話は出てこない。「ムーンライトソナタの作曲家ベートーヴェン」というイメージの確立に、『読売新聞』も『朝日新聞』も与していないのだ。

ちなみに、ピアノ曲では「月光」の他、「アッパシヨナータ」(《ピアノ・ソナタ第23番》Op. 57)もすでに明治・大正時代からこうした俗称で呼ばれているが、今では定番となっている「運命」(《交響曲第5番》Op. 67)や「皇帝」(《ピアノ協奏曲第5番》Op. 73)は何度か話題になっているものの、1927年までの記事では俗称は付されていないことも興味深い。

六

2 1920年代の新たな傾向

さて、前掲の表1で示したように、記事の数の上では1900年代、1910年代に大きな変化はないが、1920年代になって件数が急増する。本節では、1920年代になぜベートーヴェンに言及する話題が増えたのか、その背景を考えていきたい。

2-1 書籍の増加

まず、記事の件数が増加する一因は、書籍の広告や紹介が増えたからである。1915年にロマン・ロラン Romain Rolland (1866~1944) の『ベトオフェン並にミレエ』が加藤一夫 (1887~1951) の訳で出版され、ほどなくして「新刊紹介」に掲載された (読売 1915.5.7)。これは、ベートーヴェンについて日本語で書かれた (新聞・雑誌記事以外で) まとまった形での最初の著作である。その後、「有名な独逸の大作曲家にして大洋琴家であるカール・ライネツケ博士」が「厳肅に純芸術の立場から詳しく書面体に認め説き示した」『ベートーフェンのピアノ・ソナタ』 (読売 1923.5.29) や、「ベートーヴェン及 [著者である] ベルリオ [ーズ] に愛を持つ人々によつて悦び迎へられるだろう」『ベートーヴェン交響楽批判的研究』 (朝日 1923.7.24) といった訳書の広告が掲載された。日本人によるベートーヴェンの本として広く普及したとされるのは、1924年に出版された「音楽文献界の最高権威」である門馬直衛 (1897~1961) の『音楽家と音楽 ベートーフェン』で、「本書を読まない者は音楽を語る資格なし」と版元の岡田日栄堂の広告で謳われた (読売 1924.7.7)。

こうした音楽書の中で特に大きな影響力を持ったのが、著名なフランス人の作家でソルボンヌ大学の音楽学の教授だったノーベル賞作家ロマン・ロランの著作である。その広告や紹介は新聞にもたびたび掲載された。とくに1926年に高田博厚訳の『ベートーベン』への宣伝文句「此所に新しき英雄の姿がある。此書に依つて我々は彼の真のヒロイズムを理解するであろう」 (読売 1926.1.22) に注目したい。ここに表明されているように、ロランに特徴的なのは自己陶冶を通して至高な世界を形成する「英雄的な」ベートーヴェン像である。そうしたイメージは新聞広告にも表れていた。

2-2 ラジオ放送の開始

もう一つ、1920年代におけるベートーヴェン関連記事の増加の顕著な理由は、ラジオ放送の開始である。1924年に日本で最初のラジオ放送局である東京放送局 (JOAK) が設立され、1925年3月22日からの仮放送に続き、7月12日から本放送が開始された。各新聞にはラジオの番組表や当日放送される曲目・演奏者の紹介が掲載された^{xvii}。そしてベートーヴェンの作品が頻繁に放送されたため、結果的に新聞に「ベートーヴェン」の名前が多く現れることとなったのである。堀内敬三 (1897~1983) が「当時の新聞はラジオ方面を広く取って高級な音楽の解説をよくのせたので、高級音楽の普及は著しく助けられた」 (堀内 1942: 410) と回想しているように、新聞とラジオの相乗効果は決して小さくなく、ラジオ放送や新聞のラジオ欄によって、大正時代にはごく一部の教養人に限られていたベートーヴェンの音楽が大衆層へも広がっていった、という側面は見逃してはならないだろう。

七

2-3 久野ひさの「悲劇」

音楽家に注目してみると、この時期よく新聞でも話題にのぼった演奏家に久野ひさ^{xviii} (1886~1925) がいる。日本で最初に「ベートーヴェン弾き」として有名になった女流ピアニストである。彼女は15歳でピアノを始め、猛練習の末に東京音楽学校を卒業、そのまま同校の教員となった。当時の音楽雑誌や婦人雑誌に多くの記事が掲載されているが、一般紙でもたびたび取り上げられている。とくに

『読売新聞』の1914年4月にスタートした「よみうり婦人附録」にしばしば登場した。こうしたことは、当時、音楽愛好家ばかりでなく大衆にも久野が高い知名度を誇っていたことの証左であろう。

久野がベートーヴェンを殊の外好んで演奏したことも、新聞記事から確かめられる。1922年の「音楽界の新人旧人」という連載で、久野は次のように紹介されている。

久野氏がかくも有名になつたのは、その時分容易に人の手をつけなかつたベートーヴェンの大物、例へば、アパシヨナータだの、モンドシャインだのを好んで弾いたからである。筆者も実はそれを聴いた一人である。さうしてその時分恐らく日本人の手で容易に奏せられないだらうと思つていたかかるものが平然として氏の手にてびびき出されるのを見て驚いたのである。しかしもとより不満がないでもなかつた。[...] ベートーヴェンのあのアパシヨナータを弾く資格となるであらうか。氏は音の表情を考へない。氏はむしろ機械的に力一杯ピアノと戦ふという風に見江る。音楽に表情がないほど、芸術としての価値を失はせるものはない。(読売 1922.8.30)

こうした「機械的に力一杯ピアノと戦ふ」弾き方が当時の(玄人ではない)聴衆を圧倒したのである。この「戦う」ベートーヴェン像は、たとえば「無理押しの演奏」(野村 1975: 143)など、評論家からはピアノへの無理解と非難されがちだったが、ロラン的な「英雄的ベートーヴェン」を彼女なりに表現しようとした可能性はないだろうか。事実、彼女の周りにはロランの信奉者がいた。久野と親交のあった小説家の江馬修(1889~1975)は自ら「1916年に出した私の最初の長編『受難者』はロランディズムの深い影響のもとに書かれた」と語り、また久野の弟子の宮本百合子(1899~1951)が執筆した、久野がモデルと言われる教師「川辺みさ子」が登場する『道標』は、ロランの『魅せられた魂』からの影響がもっとも強い、と指摘されている(ロマン・ロラン協会 1955: 187)。

そして人気絶頂だった1923年、久野は文部省の海外研究者として、いくばくかの希望と大きな不安を抱えて単身ヨーロッパへ渡ることとなった。渡欧前の1923年2月25日に開催した「告別演奏会」のために久野が選んだ作品も、「大正六年の末以来研究を積んだベートーヴェン後期の奏鳴曲四つ [= 《ピアノ・ソナタ》 Opp. 81a, 106, 110, 111]」であった(読売 1923.2.12)。

しかし、ヨーロッパの地を踏んだわずか2年後の1925年4月20日、久野はウィーン郊外にあるバーデンのホテルから飛び降り自殺した。遺書はなく、その真の動機は謎に包まれている。このニュースは両紙で大きく報じられた。そこからは、いかに彼女のイメージがベートーヴェンと結びついていたかが分かる。『朝日新聞』は4月22日に紙面の半分近くを使い写真付きで6つの記事を掲載、ベルリン在住の社員は久野から届いた手紙を紹介した(朝日 1925.4.22)。それによれば久野は「このバーデンは私の一番崇拜してゐる、あの楽聖ベートーフェンの終えんの土地です [。] ホテルの私の部屋の真下の街の名までが『ベートーフェン街』といふのもうれしい気がします」と前年11月に書き送っていた。

渡欧後の最初の地、ドイツのベルリンで同じホテルの部屋にいたという小野つる子は、「久野さんは好きなベートーベンに聞き惚れて身の及ばぬ事をいつも嘆いてゐた」題した追悼記事で、久野がどれほどベートーヴェンに心頭していたかをありありと描写している。

ベートーベンのものをきいて来たときは、頭の毛が棒立になつて、目が真赤になつてとに角身体中がへとへとになつてゐた、他ではそんな事はなかつた [。] そしてベートーベンも人間だつた、自分も人間だ、どうしてかうまで同じ人間でありながら神と人だけのちがひがあるだらうと私の部屋で泣いてゐた、そして自分がかうやつてはるばる来たが、ベートーベンのものをきけばきく程、自分の小さひまづしい事が恥かしいと云つてゐた、もつとよくベートーベンを知りそして自分が恥かしい自分であつたら自分が死ぬより他はないと私がドイツにゐるうち中云つて居られた [。] (読売 1925.4.26)

そして小野は「あの位音楽に熱心で、あの位ベートーベンを慕つて死んだのなら、私はむしろ幸福だとさへ思つてあげてよいと思つてゐる」と締めくくつた (読売 1925.4.27)。親しい人が亡くなったことにショックを受けつつもこうした思いが出てくるとは、久野のベートーヴェンに対する思い入れは相当なものであったのだろう。久野の追悼演奏会では、ハンカ・ペッツォルト Hanka Petzoldt (1862～1937) によって「故女史が愛奏された月光」^{xxx} が演奏された (読売 1925.6.6)。

久野のことをよく知る兼常は、少し時間の経つた8月に「久野女史をいたむ」という記事を『朝日新聞』(1925.8.20) に寄せた。兼常も先に引用した記事のように、「ピアノはただ強く早くたたきつける事ばかりが熱情と努力の現れではない。ピアノはまづ純粹にピアノでなくてはならぬ」と彼女の奏法を批判。その際「ベートーヴェンのゾナーテは文学上の形容詞ではなく純粹にピアノの音楽の形式で再現されなければならぬ」、「例へばベートーヴェンのゾナーテが果たして女史の弾いた様に弾かれるべきものかといふ事に就ては私には余程疑ひがある」など、具体例はベートーヴェンを挙げていることは注目されよう。いささか厳しい論調の追悼文は、「今私共がこの哀れなる天才の遺骨を迎へて切に期する事は将来決して第二の久野ひさ子女史を出さない様にする事である」と閉じられている。久野ひさの生涯とその報じられ方からは、大正時代の音楽界、そしてベートーヴェン理解を垣間見ることができよう。

2-4 プロレタリア運動とベートーヴェン

最後に、記事の数が多いわけではないが、大正時代のベートーヴェン像を知る上で興味深い、プロレタリア運動とベートーヴェンとの関係を取り上げたい。すでに西原稔が指摘しているように、日本におけるプロレタリア運動では、ベートーヴェンの音楽が誰のための音楽であるのかという階級闘争の問題が起こっていた (西原 2000: 84-93)。西原は、主に兼常清佐の論を引き合いに出し、ベートーヴェンの音楽がブルジョア階級のものである、と見なされていたことをまとめている。こうした考えの最たるものが兼常清佐の『音楽の階級性』で、彼は「新興プロレタリアートが古いベートーヴェンを捨て、ワーグネルを捨て、ブラームスを捨てるのに何の躊躇するところがあるぞ」と呼びかけ、労働歌の必要性を説いた (兼常 1931: 35)。しかし、新聞で報じられた3つのプロレタリアとベートーヴェンに関する記事は、少し論調を異にする。

まず一つ目は1921年、パリ在住だった外交官の柳沢健 (1889～1953) が「巴里夜話 (2) 仏蘭西の社会主義者 (上・下)」(朝日 1921.3.2、1921.3.3) と題して「巴里中の社会主義者が集まつて楽聖ヴン・ベートーヴェンの生誕百五十年祭を催した」ことを報じた記事である。この催しは盛況で「何千といふ人が身動きの能きぬままでに入り込んで、その殆ど全部が所謂プロレタリア」だったそうだ。そして《レオ

ノーレ》序曲に続いて、ジョルジュ・ピオシュが約1時間の演説を行い「我々プロレタリアの悩み、苦しみ、戦ひ、並びに希望を限り無く深く現せるものであるとして、彼 [=ベートーヴェン]こそ真の革命者、彼の芸術こそ真の革命の芸術であると喝破した時には、満場破れん許りの喝采であつた」。それを聞いた柳沢は、フランスの社会主義運動を見ると「この夥しき群衆が夫々に芸術に対して深き敬意と愛とを持つてゐるといふことは、特に忘れてはならぬ点である」と書いている。

二つ目は、三川秀夫(生没年不詳)がベートーヴェン没後百年の1927年に寄稿した「ベートーヴェンと語る(上・中・下)」というベートーヴェンに向けて語りかけるスタイルの記事である。これは「英雄的音楽家」への熱狂的な賛辞で満たされている(読売1927.3.22)。そして日本でも普通選挙が実施されることを引き合いに出し「あらゆる所に、苦悩の民が手をひろげて、この自由を求めて居ます[.]その自由を求める若々しい精神が、あなたの民衆的な精神を好いてゐます」(読売1927.3.23)と述べる。興味深いのは三川が「あなたとゲーテ、それは近世の流行語で申しますならば、プロレタリアとブルジュアの対立です」(読売1927.3.23)と述べていることである。兼常とは異なり、ここではベートーヴェンはプロレタリアの側とされている。続けて、ベートーヴェンとゲーテが謁見した場にマルクスがいたならば、という仮定を述べたあと「あなたの曲符は自由の刻印——階級打破の火の粉[……]人類の共存共救——インターナショナルの平和のハーモニーとして『父なるベートーヴェン』の意義を一層瞭乎させるだらうと信じます」(読売1927.3.24)と締めた。

同様に1927年の「現代音楽の民衆化」という記事では、「それにしてもベートーヴェンなる人は我国では余りに偶像視されてはゐないだらうか」と、この時代としては珍しく「ベートーヴェン神話」に懐疑的な視点を表明するものの、「楽聖としてではなく人間として彼を見るとときに彼の作品は一層価値を増す」としてベートーヴェンがいかに「不幸な男だった」かを説明する。そして「民主主義は彼の信条であつた。だから百年後の今日彼の作品が大衆の音楽、民衆の楽器ハーモニカで吹奏されてゐることを地下でどんなにか悦んでゐるだらう」と主張する(読売1927.5.18)。ベートーヴェンの音楽がブルジョワ階級に限定されるものではなく、民衆のものだというのである。

もちろん上記3つの記事からだけでは何らかの結論を出すことは早計であろう。それでも、こうしたプロレタリアとしてのベートーヴェンに言及する記事からは、プロレタリア運動におけるベートーヴェンの立ち位置が一筋縄ではいかない様相を呈していたことが窺える。ベートーヴェンの音楽が様々な立場から利用されてきた歴史の重要な一コマであろう。

3 ベートーヴェン没後百年祭の活気

1927年は、飛びぬけてベートーヴェンの関連記事の件数が多い。その理由は明らかで、ベートーヴェン没後百年の話題が紙面を賑わせたからである^{xx}。この年の記事の54件中47件が、何らかの形で百年祭に関わる内容なのだ。「楽壇の春は楽聖の記念祭から 各団の催しにぎやかに 放送局でも力こぶ」(読売1927.3.7)、「楽聖逝いて百年 盛んなベートーヴェン祭 春の楽壇を飾る賑かな催し」(朝日1927.3.25)などの報道からは、没後百年を記念する多彩な演奏会やラジオ放送が数多く企画されていたこと、そしてそれが一般新聞をも賑わす話題となっていたことが明らかである。

3-1 東京朝日新聞社主催「楽聖ベートーヴェン百年祭記念音楽会」

最も多くの紙面で伝えられたのは、4月末から5月初めの5日間に行われた「楽聖ベートーヴェン百年記念音楽会」である。これは数あるイベントの中で一番規模の大きな催しであった。主催は東京朝日新聞社で、一部は創立間もない新交響楽団（現 NHK 交響楽団）の予約演奏会と特別演奏会を兼ねたものであった（当然ながら『朝日新聞』の記事や広告では「朝日新聞社主催」であることが前面に押し出された）。目につくのは、「ドイツ大使ゾルフ博士賛助」という一行がどの広告にも添えられていることである。ヴィルヘルム・ゾルフ Wilhelm Solf（1862～1936）は第一次世界大戦後最初の駐日大使として来日し、1921年から1929年までの約8年間日本で勤務した。「日独関係再構築のために積極的に活動し、日本で多大な尊敬を集め、日独親善に大きく貢献」した、とその評価は高い（村上 2011：44）。この音楽祭も日独の文化交流の一つと位置付けられていたのであろう。最終日の会場舞台には「日独の大国旗をもつて飾りしつらへられた祭壇」に彫刻家の藤田文蔵（1861～1934）によるベートーヴェン像が置かれていたという（朝日 1927.5.11）。こうした公的な性格も、この音楽祭の大きな特徴である。

では、この百年記念音楽会はどのようなものだったのだろうか。やむを得ない事情で当初の予告通りに行われなかったこともあってか、先行研究には若干の混乱が見られるが^{xxi}、ここではそれぞれの演奏会の翌日に掲載された『朝日新聞』の記事から、実際に行われた内容を示す【表2】。会場は、最終日が日比谷公園で行われた他は、朝日新聞社朝日講堂である。

第1日	4月28日	新交響楽団（指揮：ヨーゼフ・ケーニヒ）、レオニード・コハンスキー（pf）、ネトケ・レーヴェ（Sop） 序曲《献堂式》、ピアノ協奏曲第4番、《ああ、不実な人》Op. 65、《アダライーデ》
第2日	4月29日 ^{xxii}	新交響楽団（指揮：ヨーゼフ・ケーニヒ）、和泉千代（pf） 交響曲第1番、《自作主題による15の変奏曲とフーガ》Op. 35、交響曲第3番「英雄」
第3日	5月1日	新交響楽団（指揮：ヨーゼフ・ケーニヒ）、安藤幸子（vn） 交響曲第8番、ロマンス第1番・第2番、交響曲第7番
第4日	5月3日	新交響楽団（指揮：ヨーゼフ・ケーニヒ、合唱指揮：木下保） 松平里子（Sop）、斎藤英子（Alt）、木下保（Ten）、内田栄一（Bar）、日本音楽学校（合唱） 序曲《レオノーレ》第3番 ^{xxiii} 、交響曲第9番
第5日	5月10日	新交響楽団、陸軍戸山学校管弦楽団、海軍管弦楽団（指揮：平野主水、ヨーゼフ・ケーニヒ、佐藤清吉） ハンカ・ベッツォルト（pf） 第1部：記念式典 ^{xxiv} 第2部：記念演奏 交響曲第6番、ピアノ協奏曲第3番、交響曲第5番

【表2 楽聖ベートーヴェン百年記念音楽会のプログラム】

*人名・曲名は、今日の一般的な表記に書き改めている。

どの演奏会も好評だったようだが、第4日に演奏された、1924年の東京音楽学校での演奏以来2度目、プロの演奏としては初となる「第九」はとくに大きな感動を与えたことが伝えられている。「楽壇はいふまでもなく多くの愛好者から異常の興味と渴仰の念で期待されてゐたベートーヴェンの第九交響楽演奏の夜は予想の如く感激と陶酔とに満た数時間であつた。」（朝日 1927.5.4）さらに、最終日5月10日の記念演奏会はずでに切符が「五日中に全部渡し済み」となり（朝日 1927.5.6）、当日は「気早な会衆は五時頃より続々とつめかけ定刻に至るやその数無一万余に達しさすがに広い日比谷音楽堂が人で埋る壯観を呈した」（朝日 1927.5.11）ほどの盛り上がりとなったようだ。もちろん、これらは主催者である『朝日新聞』の記事であるため、いくらか誇張もあるかもしれない。しかし、ベートーヴェンの音楽をこれほど演奏できるだけのレベルの音楽家とそれを聴きに来る大勢の聴衆がいたこと、そしてそれら

が連日一般紙で報じられる「ニュース」であったことは、確実にベートーヴェン受容がそれまでとは異なるフェーズに入ったことを示しているだろう。

3-2 ラジオでの「ベートーヴェン祭」

時期はやや前後するが、東京中央放送局（現NHK東京本局）では3月14日から4月19日までの12日間、「ベートーヴェン祭」を放送し、それについて両新聞で記事になった。リスナーから百年祭なので「記念的放送をお願いしますよ」との声が届いていたほどで、ベートーヴェンへの関心が高まっている様子が窺える（読売1927.1.8）。この「ベートーヴェン祭」では、管弦楽作品、協奏曲、ピアノ曲、室内楽、オペラ、歌曲など実に多岐にわたる作品が放送されたのに加え、野村光一（1895～1988）、兼常清佐、牛山充（1884～1963）といった当時の著名な音楽学者による講演も放送された【表3】。演奏は、放送局と出演契約を結んでいた新交響楽団（JOAK シンフォニー・オーケストラも同楽団のこと）がメインだが、軍楽隊も加わっている。まだ演奏会の機会も少なく、レコードも高級品だった時代、これだけの作品が放送されたことには大きな意義があるだろう。東京の加入者数5455人で仮放送をスタートさせたラジオは、1927年の3月末には早くも全国で361066人にまで成長していた（洋楽放送70年史プロジェクト1997）。当時の放送部長、矢部謙次郎は「私たちは此の百年祭に際し、彼の作品を演奏し、彼の遺業を探って、人類のうち最も偉大なりし一人、嘗て世に現はれた最高の芸術家の一人であるベートーヴェンを回顧追想したいと思います」とこの放送の主旨を述べた（読売1927.3.14）。

第1夜	3月14日	小倉末子 (pf) ピアノ・ソナタ第21番ハ長調 第1、第2楽章
第2夜	3月16日	新交響楽団 (指揮: 近衛秀麿) 交響曲第3番「英雄」
第3夜	3月18日	講演: 兼常清佐「音楽史上のベートーヴェン」 JOAK シンフォニー・オーケストラ (指揮: ヨーゼフ・ケーニヒ)、ネトケ・レーヴェ (Sop) エグモント序曲、アダライーデ、ゲレルト歌曲集より第5、6曲、序曲シユテファン王
第4夜	3月19日	安藤幸子 (vn)、レオニード・コハンスキー (pf) ヴァイオリン・ソナタ第7番ハ短調 Op. 30, No. 2
第5夜	3月24日	講演: 野村光一「ベートーヴェンの作品について」 海軍軍楽隊 (指揮: 佐藤清吉) 交響曲第8番
第6夜	3月26日	講演: 牛山充「人としてのベートーヴェン」 解説・放送指揮: 伊庭孝、新交響楽団 (指揮: 近衛秀麿)、JOAK 劇楽合唱団、 松平里子、岡見幾久子、田谷力三、鳥居忠五郎、内田榮一、阿部英雄 歌劇《フィデリオ》
第7夜	3月29日	JOAK シンフォニー・オーケストラ (指揮: ヨーゼフ・ケーニヒ) 交響曲第5番
第8夜	3月30日	グレゴリー・ベッケル (vc)、ルボフ・ベッケル (pf) チェロ・ソナタ第3番
第9夜	4月1日	ジュピター・クワルテット (vn1 末吉雄二、vn2 栗原大治、va 大塚淳、vc 伊達三郎) 弦楽四重奏曲第3番 Op. 18, No. 3
第10夜	4月4日	陸軍戸山学校軍楽隊 (指揮: 平野主水) 交響曲第4番
第11夜	4月15日	ジェームス・ダン (pf)、多忠亮 (vn)、高勇吉 (vc) ピアノ三重奏曲ニ長調 Op. 70, No. 1
第12夜	4月19日	JOAK オーケストラ (指揮: ヨーゼフ・ケーニヒ)、ジェームス・ダン (pf) ピアノ協奏曲第3番

【表3 ラジオ「ベートーヴェン祭」プログラム】

新聞紙上で最も大きく紹介されたのは、このときが日本初演であった第6夜のオペラ《フィデリオ》Op. 72である^{xxxv}。浅草オペラでも活躍した伊庭孝(1887~1937)の和訳歌詞を用いての上演で、ベートーヴェンの命日である3月26日に放送された。『読売新聞』ではあらずじと各ナンバーの説明が1ページ全体を使って記され(読売 1927.3.26)、『朝日新聞』では出演者の写真付きで《フィデリオ》の詳しい紹介が掲載されている(朝日 1927.3.26)。

また、同日に放送された牛山充の記念講演を紹介する記事には、「一口に云ふと人間は意志の力さへあれば、どのやうな障害をも征服して天職を全ふすることが出来ると云ふ生きた教訓を与えてゐるところが、ベートーヴェンの一生の真骨頂であるやうに思ひます」とある(読売 1927.3.26)。苦悩に立ち向かう作曲家像は、こうしてラジオ・新聞を通して強化されていったのであろう。

おわりに

今回の調査で、一般紙においてもベートーヴェンについて多岐にわたる話題が取り上げられていたことが確かめられた。先行研究では断片的にしか言及されなかった新聞記事を軸に見直すことで、一般の人々にとっての「ベートーヴェン像」のリアリティが浮き彫りになったと言えよう。洋楽受容の黎明期にあった音楽界は、ベートーヴェンの音楽が巷にあふれている今日の私たちには想像するのが難しい。当時の実情をより深く知るには、こうした個々の事例の積み重ねが重要なのではないだろうか。今回は取り上げることができなかった他の新聞や1928年以降の記事については、稿を改めて論じたい。

注

- i 発行部数は年によって異なるが、参考までに1923年は『読売新聞』が110,000部、『朝日新聞』が290,000部であった(新聞研究所 1924: 37)。
- ii 記事の一覧は、Web上の表をご参照いただきたい。<https://bit.ly/3DjIW0s>
- iii 音楽雑誌と異なり、新聞にベートーヴェンの生涯や作品自体をテーマとする記事は少ない。興味深いのは、1907年に「こしのみね」(本名不詳)が『読売新聞』に寄稿した「ベトウエー(上・下)」である(読売 1907.5.2, 1907.5.3)。そこでは「一番日本人の耳に愉快に聞こえて、日本人の嗜好に善く適して居る音楽家は誰ぞと言へば、先づモザルトかベトウエーであらうと思ふ。而して音楽流行の今日では日本にも大分ベトウエーの崇拜家もあうだらうと思ふから、その逸話を少しく紹介しようと思ふ」とされたうえで、音楽作品にはまったく触れることなく、いくつもの「逸話」が語られる。こうした「文字を介した音楽の受容」はこの時代の洋楽受容に典型的である。
- iv レコードについては、今回の調査対象ではないが『報知新聞』で野村あらえびす(1882~1963)が1924年から「音楽漫談ユモレスク」という連載をし、毎週新作のレコードを紹介していた。
- v 『東京日日新聞』や『時事報知』にはプログラムに関する記事がより頻繁に記載されている。
- vi ベートーヴェン《6つのワルツ》Anh 14より第1番。やや編曲されたフランツ・シューベルトの《悲しみのワルツ》D 365 No. 2, Op. 9 No. 2と、トリオ部分に《3つのドイツ舞曲》D 972を組み合わせたワルツで、初版はピアノ曲であった。
- vii なお、この記事の後半では「山葉製オルガン及び鈴木製弦楽器」が話題となっている。
- viii ただし兼常は「音楽に経験の少い日本では」ベートーヴェンが先人のモーツァルトやハイドン、ロマン派の

ショパンやブラームスに対してどのような芸術上の地位を占めているのか、知られていないことを批判する。しかしまた、バッハやモーツァルトではなく「深い芸術的な思想の背景を持ち芸術的な熱情に溢れた」ベートーヴェンがまずまとまって日本に紹介されたことは幸いだった、という。

- ix 男性の音楽愛好家がベートーヴェンを演奏したという記事はほとんどない。今回の調査範囲で唯一プロではない男性の演奏に言及してあるのが、「宮様が初めてステージに」（読売 1927.11.24）という記事である。興味深いことに、ここでは久邇宮邦英王殿下（東伏見慈洽、1910～2014）がベートーヴェンの《ピアノ協奏曲第1番》Op. 15 を学習院中等科の学生と共に「火の出るような練習をされている」と報告されている。
- x 新聞記事ではないが、1920年に発売された雑誌『少女』第97号の付録の「少女生立双六」には、「ピアノ独奏 大好きなベートウベンのソナタが弾けて、うれしい」というコマがある。
- xi 日本では1940年代以降、徐々に「第九」が年末によく演奏されるようになった。
- xii 田村は東京帝国大学出身の美学者で、東京音楽学校のドイツ語教師も務めた。1924年には東京音楽学校での「第九」の上演に合わせ『ベートーヴェンの「第九ジユムフォニー」』（岩波書店）を出版した。
- xiii たとえば野村あらえびすは、輸入元の阿南商会からサンプルが入ったとの連絡を受け、「その7枚のレコードを宝物のように守護した松本松崎両君と共に、当時雑司ヶ谷に住んでいた私の家まで持つて行」ったという（野村 1953: 65）。
- xiv 1824年にウィーンで初演された「第九」は、この年ちょうど初演から数えて100周年を迎えた。HMV盤の発売は「第九」初演100年を記念したものであったが、東京音楽学校でもそのことを意識していたかどうかは分からない。
- xv 日本における「第九」の初演は、1918年6月1日、現在の徳島県鳴門市にある板東俘虜収容所でのドイツ人捕虜による演奏であった。日本人による演奏としては、1924年1月26日、九州帝国大学音楽部による演奏が最初だが、これは第4楽章のみ（日本語の歌詞）であった。それでも、当時の記事はどれも、東京音楽学校での演奏を「本邦初演」として扱っている。
- xvi この記事では、指揮者のグスタフ・クローンが「五月頃練習を始めたが此演奏が成功すれば私が永年日本で教へてみたとも無駄ではない」と語ったことが写真付きで伝えられている。
- xvii 新聞社の中で最初に番組表を掲載したのは『読売新聞』で、1924年11月15日から「よみうりラヂオ版」が始まった。
- xviii 「ひさ」「ひさ子」「久」「久子」など様々に表記されるが、本稿では引用以外「ひさ」に統一する。
- xix 久野ひさが弾いた「月光ソナタ」は彼女が残した唯一の録音で、没後の1926年に富士山レコードから発売された（現在、復刻版のCDで聴くことができる）。
- xx 「100年忌」という考え方から、1926年にも高村光太郎（1883～1956）の「楽聖をおもふ ベートオヴェン百年忌に当り」（朝日 1926.2.18 - 2.20）など若干の関連記事が掲載された。
- xxi 指揮者は近衛秀麿の予定だったが、腸チフスで入院したため、代役としてヨーゼフ・ケーニヒが指揮した（朝日 1927.4.22）。また、5月4日に予定されていた日比谷公園音楽堂での記念式典と記念音楽会は、臨時議会開会中のため使用許可が下りず、10日に延期された（朝日 1927.5.3）。
- xxii プログラムには記載されていないが、この日は天長節だったため「全員起立の内にまづ『君が代』を奏した」（朝日 1927.4.30）。
- xxiii 序曲の後、ゾルフ大使の挨拶および百年祭の功労者の表彰が行われた。
- xxiv このとき「音楽界功労者」として故伊澤修二と故瀧廉太郎が表彰された。
- xxv これは1927年2月に始められた「放送歌劇」の第2回で、オペラをスタジオから中継放送するものであった。『都新聞』や『時事新報』等、他の主要新聞でも歌詞などが大きく扱われ、放送の理解を助けた。

引用文献

『朝日新聞』（聞蔵Ⅱ：朝日新聞社データベース）

- 兼常清佐. 1931. 『音楽の階級性』 東京：鉄塔書院.
- 新聞研究所編. 1924. 『日本新聞年鑑』 東京：新聞研究所.
- 谷村政次郎. 2010. 『日比谷公園音楽堂のプログラム：日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』 東京：つくばね舎.
- 西原稔. 2000. 『「楽聖」ベートーヴェンの誕生：近代国家がもつめた音楽』 東京：平凡社.
- 野村あらえびす. 1953. 『音楽は愉し』（音楽文庫 70） 東京：音楽之友社.
- 野村光一. 1975. 『ピアノ回想記：ピアノに惹かれて 70 年』 東京：音楽出版社.
- 堀内敬三. 1942. 『音楽五十年史』 東京：鱒書房.
- 福本康之. 1999. 「日本におけるベートーヴェン受容（1）昭和 2 年のベートーヴェン没後 100 年祭」『国立音楽大学音楽研究所』 第 13 巻, 75～92 頁.
- 福本康之. 2000. 「日本におけるベートーヴェン受容（2）明治・大正期の音楽雑誌の記事から」『国立音楽大学音楽研究所年報』 第 14 巻, 115～134 頁.
- 福本康之. 2004. 「日本におけるベートーヴェン受容（5）明治 40 年までの演奏記録を読む：資料と解題」『国立音楽大学音楽研究所年報』 第 18 巻, 177～190 頁.
- 村上直己訳, カール・ツァール著. 2011. 「駐日ドイツ大使ヴィルヘルム・ゾルフ」『熊本学園大学論集「総合科学」』 第 18 巻 (1), 43～61 頁.
- 洋楽放送 70 年史プロジェクト編. 1997. 『洋楽放送 70 年史：1925～1995』 東京：ミュージアム図書.
『読売新聞』（ヨミダス歴史館：読売新聞社データベース）
- ロマン・ロラン協会編. 1955. 『ロマン・ロラン読本』 東京：河出書房.